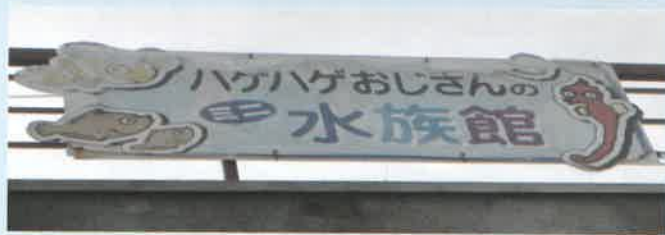




吉政さんは、播磨マリンクルーの代表をされており、こどもを対象にした「出前水族館」をされています。海水が入ったタライに高砂沖の生き物を放し、こども達が直接触れることができます。「海の生き物」がテーマの切り紙や折り紙、音遊びも一緒に体験できます。



前号でご紹介した『ハゲハゲおじさんのミニ水族館』のハゲハゲおじさんが気になる！ということで、ハゲハゲおじさんこと、吉政静夫さん取材しました。



始めるきっかけとなったのが、行きつけの飲食店で仲良くなった漁師さんに見せてもらった、タツノオトシゴ。それは砂沖で捕れたものでした。幼い頃から身近な海に、そんな珍しい生き物がいるとは思わなかった吉政さんは、愛嬌のある姿のタツノオトシゴに魅せられ、写真や動画に収めていました。世界的にも珍しい生殖活動や出産シーンの撮影にも成功し、多くのメディアで取り上げられました。初めは、この映像を通して、高砂沖の豊かさをこども達に伝えようとしたのですが、映像だけではなかなかその感動は伝わりにくいことから、漁師さんに売り物にならない魚や生き物を譲ってもらおうように交渉し、出前水族館を始めたそうです。

かつてこども達にとって身近な遊び場であった高砂の海岸は、戦前から高度成長期にかけて埋め立てられ、大規模工場ができました。高砂海浜公園に海岸は残るも人工の砂浜で、近年アオサの異常発生が続いています。しかも、このアオサがアサリなどの生き物を脅かし、悪臭の原因にもなっています。そこで吉政さんは、高砂海浜公園海辺の保全の会を結成し、アオサの回収にも力を注いでいます。

播磨マリンクルー代表 吉政静夫さん

ほっくりんの
親子で遊べるドイツゲーム

第6回目 『ラビットラリー』

対象年齢 4歳から
所要時間 15分
橋の足場を目測で置く徒競走



サイコロの色で指示された長さの橋板を、よりゴールに近づけるように、次の足場コマをギリギリの場所に目測で置いてから、実際に橋板を渡してみる、というギャンブルをしながら自分のウサギを進め、いち早く金のニンジンがあるゴール島を目指します。

実際にプレーしてみた筆者の感想としては、子どもがプレーする場合は、慎重に足場となる石を置き、大人は大胆に少しでもゴールに近づけようと欲を出します(笑)大人と子どもで一緒にプレーすると、大人は「まだまだいけるよ」と思わず横から口を出したくなります。」「足場は離したいけど、もし届かなかったら進めない」という悩ましさも盛り上がるゲームです。特に大人だけで楽しむ場合にオススメなのが、よりギャンブル性の高い「足場を適当に置いてから渡す橋板がランダムで決まる(サイコロを振る)」ルールです。このルールでやることで、お互いの性格などが垣間見えることでしょう。

他にも、スタート位置とゴールの間に障害物を設置し、迂回させてゴールを目指すようにするなど、いろいろなバリエーションで楽しむことができます。

